ごきげんマッティ

1．むかし、あるところにおじいさんとおばあさんがいました。彼らには２人の息子がいました。どちらも良くできた子で、悪いところなどありません。兄はトイヴォ、弟はマッティという名前でした。

2．トイヴォは良くできた働き者でしたが、生真面目で寡黙でした。笑いもせず、歌いもせず、パイプから煙を出すばかりです。湖で魚をとるときも、森で木を伐るときも、家でスキーをこしらえるときも、いつもだんまり。そのため皆に”だんまりトイヴォ”と呼ばれていました。

3．いっぽう、マッティは正反対。働くときは歌をうたい、話をするときはいつもごきげん。それにカンテレを弾くこともできました。彼がカンテレの弦をはじき、楽しい曲を奏でると、誰ひとりその場に立っていることなんてできません。なにせ音楽に合わせて踊らずにはいられないのです。そのため皆に“ごきげんマッティ”と呼ばれていました。

4．ある日、だんまりトイヴォが薪をとりに森へ出かけました。道辺にソリを停め、傍らに馬を残しました。パイプに火をつけ、立派な松の木を選びました。オノで切り始めると、森じゅうに音がとどろきました。

5．ところが、松の木の根元ではクマが巣穴で冬眠していました。大きな音に、クマが目を覚ましてしまいました。
「いったい誰だ、オレ様の眠りをじゃまするのは」
クマは穴から抜け出すと、うなり声を上げました。

6．クマは若い男が松の木を伐っているのを見つけました。オノを振るたびに、木くずが飛び散っていきます。木を伐っているトイヴォは、毛皮の帽子を深くかぶり、眉間にしわを寄せ、パイプを口にしています。

7．クマは怒りました。
「オレ様の森でうるさくしやがって！眠れないじゃないか！おまけにもくもくとパイプをふかしやがって！
とっとと出ていけ！」

8．クマはまえ足でトイヴォに襲いかかりました。トイヴォのシャツは破れ、斧は落ちてしまいました。彼はまっさかさまに、ソリに突き飛ばされました。ビックリした馬が、一目散に駆けだしました。ソリはくぼ地を飛びこえ、切り株をまたぎ、家へ逃げ帰っていきました。こんなことが起こったんですって！

9．だんまりトイヴォは、命からがら帰りつきました。薪もオノも持たず、上着はズタズタです。けれども、どうしたって薪が必要です。暖炉をあたため、お母さんはパンを焼かなければなりませんから。

10．そこでとうとう、ごきげんマッティが森へ行くことになりました。オノとカンテレを手にすると、ソリにのって出発しました。道すがら、マッティはカンテレを弾き、嬉しそうに歌をうたいました。

11．ごきげんマッティは森にやってくると、切れ目の入った松の木と、そばに落ちているオノを見つけました。馬を停めて考えました。
「なるほど、トイヴォ兄さんはここで伐っていたんだな」
マッティは道辺にソリを停め、オノをひろうと、木を伐りはじめようとしました。

12．木を伐りはじめようとして一思いなおしました。「よし、まずはカンテレでもひと弾きするかな。仕事が上手くいって、もっと楽しくなるぞ」ほら、マッティって、いつでもごきげんでしょう！切り株に腰かけると、弾きはじめました。美しい旋律が森じゅうに響き渡りました。

13．またしてもクマが目を覚ましました。ところが、今回は怒ってはいません。注意深く穴から抜けだすと、弾き手に目を向けました。

Finnish & Karelian folk tale “Matti Veitikka” (Jolly Matti)" 日本語訳 TERESIANKANTELE (MT)

14．若い男が、帽子をはすにかぶり、ほっぺたを赤くして、キラキラした目で、歌を口ずさんでいます。クマが聞き入っていると、足がひとりでに動きはじめました。クマは立ち上がり、踊りはじめました。

15．カンテレの音が楽しさを増すと、クマの足も速く動きました。クマは大声をあげました。
ガルルルル、ズシン　ドシン
クマはひたすら、踊りつづけました。

16．ごきげんマッティが弾く手をとめると、クマもやれやれ、ひと息ついて言いました。
「おい、若ぞう、オレ様にカンテレを教えるんだ！夏に子どもたちと踊ったら、さぞかし楽しいだろうな！」
「いいとも」
マッティは答えました。
「喜んで教えようじゃないか」

17．マッティは、カンテレをクマの膝に置きました。すぐさまクマは、分厚い手で弦をたたきましたが、音楽なんてものじゃありません。ただ嫌な音が鳴るだけです。
「これじゃだめだな」
マッティは言いました。

18．「君の手は太すぎるんだよ。もっと細くしないといけないな」
マッティは、クマを大きなモミの木へつれて行きました。オノで木に切りこみを入れ、そのすき間にくさびをはさみこみました。

19．「さあ、すき間に手をつっこむんだ。それから、ぼくが良いと言うまで、抜いてはいけないよ！」
クマはすき間に手をつっこみました。

20．クマがすき間に手をつっこむと、マッティはすぐに、オノでくさびを打ちつけました。くさびはポーンと飛んでいき、クマの分厚い手がはさまれました。クマは痛くてうなり声をあげましたが、マッティはただ笑っているだけです。
「がまん、がまん！手を細くしないとね！」

21．「やめてくれ、もうたくさんだ！」
クマはわめきました。
「カンテレなんてうんざりだ！オレ様を放せ！放してくれ！」
「だけど、森に来た人をまた怖がらせるんだろう？」
「そんなことしないさ！」
クマはうめきました。

22．
「約束するか？」
「約束するよ！もう帰してくれ！」
「誓うだろうな？」
「誓うさ！放してくれ！」
マッティはふたたびくさびをすき間にはさみました。クマは手を引きぬくと、一目散に巣穴へ駆けていきました。

23．ごきげんマッティは、落ちついて木を切ると、ソリを薪でいっぱいにしました。積みあげた薪の上にすわると、カンテレを膝にのせ、歌い弾きながら家へと帰っていきました。ほらね、ごきげんマッティって、本当にごきげんでしょう！

24．それからというもの、人々は冬にクマを恐れることなく、安心して森で薪を求めることができましたとさ。
おしまい。